

# 「Face-To-Faceの会」たより

第26号 2015年01月 発行：大阪市立大学病院「Face-To-Faceの会」 文責：平田一人（世話人代表） 連絡先：06-6645-2857 患者支援課

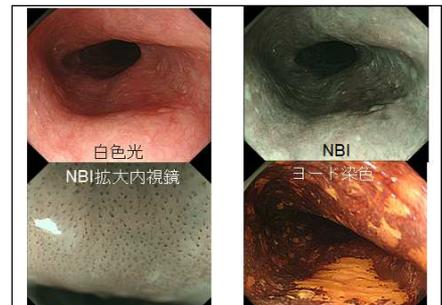
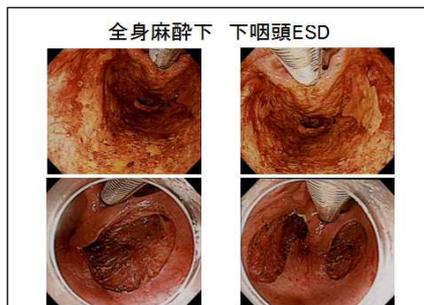
## ミニレクチャー

### 『消化管癌に対する内視鏡診断と治療』

消化器内科 病院講師 永見 康明



内視鏡技術の進歩により、消化器癌に対する消化管内視鏡の担う役割は大きく変化してきています。内視鏡下粘膜下層剥離術（Endoscopic submucosal dissection; ESD）の登場により、大きさに関わらず癌を一括切除することが可能となりました。早期に治療を行えば外科手術やその他の治療と比べて侵襲性が低く、また、臓器を温存できることで、術後の食生活を含めたQOLも良好であり、患者の負担は少なくなります。これに伴って、早期に癌を発見すること、癌と診断すること、内視鏡治療の適応があるかを診断することがより重要となってきています。そんな中、短波長の光のみを使用した狭帯域光内視鏡（Narrow band imaging; NBI）とズーム機能の付いた拡大内視鏡内視鏡の登場、進化により、より詳細な内視鏡診断が可能となっています。食道癌の早期発見、質的診断、深達度診断、胃癌に対する質的診断、範囲診断、大腸腫瘍に対する質的診断、深達度診断などに有用とされ、当科でも術前診断やスクリーニングなどで使用しています。できるだけ負担の少ない治療をできるように日々研鑽をつんでおります。また、最近ではこの消化器領域で進化した技術を用いて、咽頭領域でも応用し、耳鼻咽喉科と共同で治療を行っています。今後はその他の分野ともコラボレーションしながら、診療を行っていきたいと考えております。



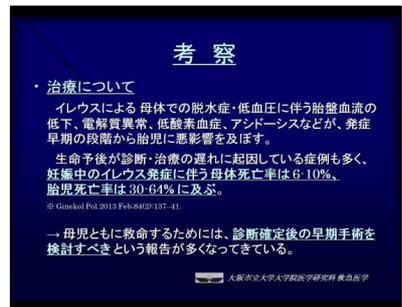
## 症例呈示

### 『妊娠中期に発症した癒着性イレウスの一例』

救命救急センター 病院講師 加賀 慎一郎

妊娠中のイレウスは1,500-66,000症例に1例と稀に報告されています。イレウスは母体における脱水症・低血圧に伴う胎盤血流の低下、電解質異常、低酸素血症、アシドーシスなどをきたすため、発症早期の段階から胎児に悪影響を及ぼします。一方、X線を用いた画像診断を行う際、放射線被曝による胎児への催奇形性、中枢神経障害、発癌性などを憂慮すると、確定診断や手術決定のタイミングが遅れかねません。最近の報告でも、妊娠中のイレウス発症に伴う母体死亡率は6-10%、胎児死亡率は30-64%と、未だ予後不良と言わざるをえない状況です。また、非絞扼性や非穿孔性イレウス症例に対する外科的・保存的加療の選択において、妊娠継続や胎児保護の観点から統一された見解はありません。

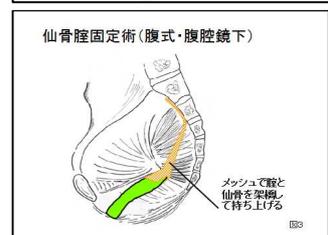
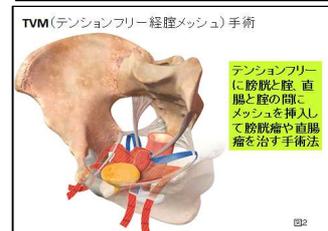
ACOG（アメリカ産婦人科学会）のガイドライン・ICRP（国際放射線防護委員会）の提言に因ると、診断用放射線量が胎児への悪影響と因果することはほぼありませんし、母児ともに救命するためには診断確定後の早期手術を検討すべきという報告が近年は増加しています。今回、妊娠26週にて癒着性イレウスを発症し、診断および治療方針決定に難渋した当科での1経験例を発表致しましたが、開腹歴などを念頭にCT撮影を躊躇せず早期の確定診断を行うことで、適切な手術時期を逃さぬよう心がけることが、母児の生命予後にとって重要と考えます。



### 『腹腔鏡を用いた骨盤臓器脱の最新の治療』

女性診療科 病院講師 羽室 明洋

女性の平均年齢は世界第一位となっており、一生涯を通じた「Women's Health Care」の重要性が高まっている。一生の間に骨盤臓器脱や尿失禁など骨盤底のゆるみのために、医学的治療を受ける頻度は11%とされており、その90%は医学的治療によって改善または治癒させることが可能であると考えられている。主な原因として妊娠、分娩、加齢、ホルモン欠乏、便秘、肥満、骨盤手術後などがある。保存的治療の主なものとして骨盤底筋体操や膣内矯正リングペッサリーなどがある。保存的治療では効果の少ない患者に対して外科的治療へ移行する。骨盤底のゆるみはその原因により損傷を受ける部位がさまざまであり、その損傷部位を修復するように手術することが重要である(図1)。従来より骨盤内の仙骨子宮靭帯や仙棘靭帯に固定する方法が行われてきたが、もともと脆弱な組織に固定しても臓器脱の再発が多かった。そこで、2005年頃よりメッシュを使用した「Tension Free Vaginal Mesh手術：TVM手術」(図2)が行われるようになってきたが、メッシュびらんや感染の合併症が指摘されてきている。仙骨と膣をメッシュで固定する仙骨膣固定術は従来よりある術式であるが開腹下で行うため、患者の手術侵襲が大きく行うには躊躇があった。そこで開腹ではなく、腹腔鏡下で行う「Laparoscopic Sacral Colpopexy：LSC」(図3)が本年保険収載され、今後広く行われる術式となる可能性があり注目されている。



次回開催のお知らせ 第27回Face-To-Faceの会  
平成27年2月21日(土) 15:00~17:00 於: 大阪市立大学医学部附属病院 5階講堂